
研 究 報 告

火山噴火に伴う長期避難生活を体験した後期高齢者に
帰島を決意させた要因
－三宅島の2000年火山噴火に焦点をあてて－

成島ますみ

An Explanation of Factors in Senior Citizens Decision
to Return to Miyake Island after a Long Evacuation

Masumi Narushima

キーワード：三宅島、帰島、高齢者、長期避難

key words : Miyake Island, return to Island, senior citizens, a long evacuation

Abstract

【Purpose】

The purpose of this research is to explain the factors in senior citizen's decision to return to Miyake Island after a long evacuation. In 2000, a volcano erupted and expelled a lot of rock and ash last June in Miyake Island. So all citizens were then evacuated to Tokyo by ship on the September. They then lived in Tokyo for about 4 years and 6 months. Most of senior citizens then chosen to return to Miyake Island.

【Method】

Two separate times I interviewed 10 peoples in their homes. They were informal interviews using on IC recorder, The people I interviewed returned to the Island and have been living in there since 2005. Collected data was analyzed qualitatively.

【Result】

In their decision to return to the Island , there are 5 factors to consider. The factors are the economy, family, psychology, health and community. These factors are not separate, they have a direct connection and a mutual relationship with each other. However the factor of the economy is connected only with the factor of family.

In addition , they had to pay rent for their rooms after April 2005. It was burden for them. Therefore, they decided to return to Island.

【Conclusion】

1) Most of the Island' s citizens feel nostalgia; they want to return to the Island deep down at heart.

受付日：2011年8月9日 受理日：2011年12月3日

桜美林大学大学院老年学研究科博士後期課程 Doctoral Course in Gerontology J.F. Oberlin University, Graduate School of Gerontology

Most senior citizens feel that there is a different culture and value-system between Tokyo and Miyake.

- 2) One senior citizen said “we were evacuating, It was hell”. They wanted to get back to Miyake Island soon. They kept their patience under control during difficult times.

要旨

三宅島の島民は、火山噴火と有毒ガス噴出の為2000年9月1日全島民避難の指示を受け、島を出た。集落と関係なく集合住宅に入居した島民は、4年半に亘る避難生活を内地で送り、避難指示解除後、帰島する島民と内地に留まる事を選択する島民とに二分した。本研究は、火山噴火に伴う長期避難生活を体験した後期高齢者が帰島を決意するに至った要因を明らかにする事を目的とし、質的記述の研究で実施した。

逐語録から次の5つのカテゴリーを抽出した。経済的要因、家族的要因、心理的要因、健康に関連する要因、コミュニティに関連する要因であり、これらの要因は単独では存在せず互いに繋がり絡み合い影響し合っていた。

また、抽出した5つの要因の中心を成すものは「住み慣れた島に帰りたい」という思いであった。

I. はじめに

A. 研究の背景

1. 三宅島2000年火山噴火

1) 噴火の概要

2000年噴火は6月26日に出された「緊急火山情報」に始まった。7月から活動が活発化し、8月10日、12日に山頂噴火、溶岩の流出はないものの大量に降灰し、8月18日には噴煙が高さ1万4000mに達する大噴火があり、全島が厚い降灰に覆われた(三宅村, 2008, p.10-11; 木村, 2007, p.46-47; 浅野, 2007, p.167)。8月29日の大噴火時には低温火砕流の発生に加え、毒性の強い火山ガス(二酸化硫黄)の放出が確認されるようになった。この為9月1日には全島避難が決まり、全島避難が9月2日から3日間で行われた。島民の多くは過去の経験から1週間から10日、長くても2~3ヶ月で島の戻れるだろうと考え、最小限の衣料等の荷物を持って避難していた。避難は全体の88%が都内に、その他関東地方を中心に全国に及んだ(三宅村, 2008, p.43)。結局、2000年9月1日に出された全島避難指示以降、2005年2月の避難指示解除と帰島まで、4年半に及ぶ全島民の島外での避難生活となった。

2) 2000年噴火の特徴

三宅島では、雄山が過去何度も噴火しており、ほとんどの島民が噴火体験している。しかし、過去の噴火はいずれも雄山の山腹から溶岩が流出し、短期間で噴火が収まるケースが多かったのに対し、2000年の噴火は、前例のない山頂からの噴火で、噴火現象も噴石や降灰が中心であった。さらに島民を不安に陥れたのは、7月8日の噴火以降、噴火の規模が拡大の一途をたどり、いつもなら溶岩が出て噴火は終わるはずなのに溶

岩が流出する兆候もなく、終息の兆しが全く見えなかったためでもある(三宅島, 2008, p.30)。

3) 全島避難

全島避難は9月2日から3日間かけて実施された。「この災害では、過去に例のない噴火現象に身の危険を感じた多くの島民が全島避難の決定の前に島から脱出していた。その数は全島民の3分の1に及んだ」(木村, 2007, p.46-47)。東京都内に避難した島民には、空いている公営住宅が提供された。従って災害時に通常建設される応急仮設住宅の建設は全くなかった。「高齢者が多い中での、全島避難行動、東京を中心に全国に散った島民の仮住まいの確保と先の見えない長期の避難生活、帰島という三宅島史上かつてない厳しい状況を背負った」(浅野, 2007, p.167)。

B. 研究の動機

三宅島は帰島許可がおりて5年目に入り、人口構成は65歳以上の人口が37.3%を占める島となっている(国土地理協会, 2009)。後期高齢者が「帰島」を決意するまでの思いと迷い、心の揺れはいかなるものであったか。三宅島に関する研究は主に医学系、工学系、社会学系論文等多くあるが、後期高齢者における郷愁の「思い」やニーズについての先行文献は見当たらなかった。社会学の村(2009)は、2005年から2008年まで帰島した島民がどのように復興を果たして行くかを目的に、訪問面接によるデータを収集し量的研究を行っている。それによれば高齢化率は40%を超え、生産的な産業は育たず、交通不便・火山ガスが重なり、若者離れで先行きに夢が持てない状況とある(p.205)。長期避難生活を体験した三宅島の後期高齢者が、帰島を決意した要因をインタビューから知ることにより、地域に合ったサービスやサポートシステム等が見えてくるのではないかと考え、この研究を開始した。

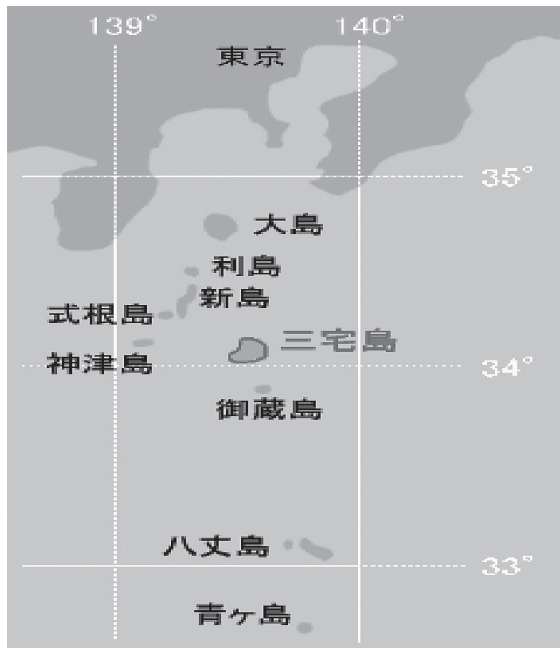


図1. 三宅島の位置

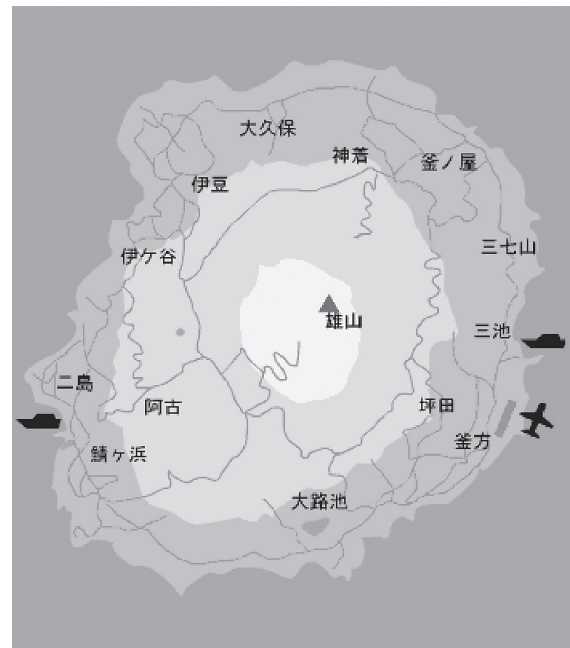


図2. 三宅島の地図

〔三宅島 (2009). 三宅島MAP. <http://www.miyakejima.net/map.html>より〕

C. 文献検討

1. 高齢者と避難生活

阪神・淡路大震災に関する論文・報告書を通して高齢者と避難生活について考えてみる。まず、高齢者は新しい環境への適応力が不十分である為、住環境の変化によって生活に困難を来し易い(酒井, 2008, p.132)という特徴があり、そのため避難した先での生活に馴染めない可能性も考えられる。阪神・淡路大震災時、仮設住宅では住宅環境の悪さや住宅内の人間関係のこじれなどが考えられ、復興住宅では孤独感を感じている高齢者が目立ち、ストレス要因として、健康以外に男性では対人関係、住環境が上げられ、女性では家族、夫、将来といった要因があった(池田・山本・中野ら, 2002)。住環境に関して、「住宅」が住み易い場に成っているかどうかは、その人の生きる気力にまで関わるものであり、その人毎にその「便利さ」の意味が変わってくる(黒田, 2006, p.42)、高齢者にとってその人の状態に合わせた個性を考慮した住宅・空間が重要である。戸建て住宅に住んでいた人が、高層住宅に入居すると孤立化が生じやすい(塩崎, 2007, p.133)とも言われる。

被災高齢者にとって「住み慣れた元のまちに戻りたい」は「生きる希望」であり(黒田, 2007, p.135)、彼らにポジティブな影響を与える要因として、社会資源の存在、助け合える隣人の存在、助け合える家族の存在、住宅等の生活環境、情報の存在(中山, 2003)がある。また、多くのサポートを持ち、普段から親しく付き合う人たちが多くいる者は、そのような人間関係から積極的な問題対処が出来、主体的なコミュニティの

形成に繋がる(大野・能川・中野ら, 2001)という結果が報告されている。「高齢者の喪失体験とは、退職などの役割や立場の喪失、配偶者との死別や親しい人との別離、生活の歴史が刻み込まれた家の建て替えや住み慣れた故郷を去るといった精神的な財産の喪失である。高齢者にとって「過去」は現在の拠り所である」(竹中, 2006)。中西(1999)は「多くの高齢者にとって、『もとの地域に戻る』ことは願いである。高齢者にとって本来の意味での生活再建は、住み慣れたもとの地域社会がそこで暮らす人々によって活気を取り戻し、近隣の網の目の中で、自立できる生活を営むことにある」(p.164)と述べている。

2. 三宅島の帰島意向調査

東京都や三宅村は、2002年9月から2003年3月まで「火山ガスに関する検討会」を設置し検討結果を取りまとめ、その後2003年4月頃から火山ガスの危険性の周知を目的とした住民説明会を実施した(三宅村, 2008)。2004年9月からは帰島希望者を対象に火山ガスに対するリスクを判定するために健康診断を実施、火山ガスに敏感な人は「高感受性」と認定された。そして翌2005年2月、三宅村は計画通り避難指示を解除した(木村, 2007, p.48)。

2004年5月に村が実施した帰島意向調査によれば、20歳から30歳の「帰島の意思あり」は52%であるのに対し、60歳代は84%、70歳以上でも76%が「帰島の意思あり」であった(三宅村, 2008)。「高齢者の方ほど」帰るつもりになっていたことは確かである。「何事も決して楽ではなかった時代から、何回かの噴火を経験しながら厳しい環境の海山で育ち働いてきた世代の人

たちの故郷への愛着は大きい」(桑村, 2009, p.215) 事が分かる。

II. 研究目的と意義

三宅島の2000年火山噴火に焦点を当て、噴火に伴う長期避難生活を体験した後期高齢者が、帰島を決意するに至った要因を明らかにすることを目的とする。

三宅島のように火山噴火により長期間避難生活を強いられる事例は、世界的にも稀有なものである。しかし、災害により今まで住んでいた地域から短期或いは長期に移住しなければならない事象は、日本においても世界においても、今後とも起こりうる。

現在、災害看護の主たる活躍の場は発災直後及び急性期に有るが、災害要援護者である高齢者に支援が必要となるのは、発災直後や急性期だけでなく、数ヶ月から数年後という中長期にある。精神的なストレスから身体機能も更に低下し、生き甲斐や楽しみも失いがちになる被災高齢者において、その人らしい老年期を過ごせるようサポートすることは、災害看護において不可欠な役割であると考え。高齢者の思いを生の言葉から聞き取り、どのようなサポートが有効であるかを知ることは、災害看護を構築することにおいて、後期高齢者支援のあり方を考える際の一助となると考える。

III. 用語の定義

本研究における用語は以下のように定義した。

要因:物事の成立に必要な因子、主要な原因(新村編, 1998, p.2736)。

今回の場合は物理的、経済的等の可視的要因と共に存在する精神的等の不可視要因も含むこととした。経済面、家族との人間関係、知人・友人との関係、島への思いなど帰島を決意する際影響したものを全てを要因として捉えた。

長期避難生活:通常、災害が起きると災害救助法23条により応急仮設住宅が建てられる。応急仮設住宅は建築基準法第85条により2年間と言う期限が定められている。今回の場合、自然災害によって、4年以上避難生活を強いられたので、長期避難生活という語を用いた。

避難生活と在京生活:2000年9月1日の全島避難を受け、三宅島島民は主に東京に避難した。避難命令を受け島外で過ごした生活を「避難生活」と言う言葉で表し、2005年2月1日の避難解除を受け、その後も帰島せず東京で生活することを「在京生活」と言う言葉で表した。

後期高齢者:総理府統計局の資料より65歳以上を高齢者とし(総理府統計局, 2010)、後期高齢者医療制度から65歳以上75歳未満を前期高齢者、75歳以上を後期

高齢者という表現とした(厚生労働省, 2010)。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン:質的記述的研究
2. データ収集期間:2009年6月中旬~2009年9月上旬
3. データ収集場所:東京都三宅島三宅村(主に自宅にて実施)
4. 研究参加者:長期避難後帰島し三宅村に暮らす後期高齢者10名
5. データ収集方法:インフォーマル・インタビューを実施した。

1回のインタビューは60~90分で、2回のインタビューを依頼した。

了解の下にICレコーダーで録音し逐語録に起こした。同時にメモを記し、両者を使って分析を進めた。

6. 分析方法

火山噴火に伴い長期避難した高齢者の帰島に至った要因は何かという研究の目的について、島の風土・文化・環境との関連に着目しつつ、下記のようにデータ分析を行った。

- ①2回目インタビューの逐語録、メモを繰り返し読み、逐語録から今回の目的から外れる部分を分別し、1フレーズが1行位になるよう要約した。
- ②フレーズを内容ごとに集め分類し、サブカテゴリーを編成した。
- ③サブカテゴリーの中で同質のものを集め分類し、カテゴリーを編成した。
- ④更にカテゴリーの中で同様に分類し、コアカテゴリーを編成した。
- ⑤コアカテゴリー間の関係を検討し、分析結果をまとめ概要を文章化した。

逐語録は信頼性を高める為、作成後インタビュー参加者に内容の確認を行い、更にこれらのデータ分析の全過程において、解釈の妥当性を高める為に、指導教授よりスーパービジョンを受けながら進めた。

7. 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字看護大学倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施した(承認番号 第2009-28号)。

研究参加者における同意は、研究の説明書に沿って研究の目的、意義、方法などを口頭と文書で説明し、同意書を2通作成し取り交わした。研究参加は本人の自由意志であり、否定してもなんら不利益が無いこと、いつでも中止可能であることを十分に説明した。インタビュー時は過度な緊張のない様、人間関係が出来てから録音する等配慮した。インタビューガイドに沿って質問するが、研究参加者が自由に話せるよう、話は出来るだけ遮らないように注意しながら進めた。

インタビュー開始前に、録音の了解を確認した。得られたデータは匿名で処理し、面接内容を記述する際には、氏名や地名などの固有名詞は使用せず記号化する、個人が特定できるような具体的な情報は記載しないことを約束した。研究発表の際には内容をデータ化し研究参加者が特定出来ないよう十分注意することを約束した。研究結果の成果物或いはその一部を、研究参加者にお届けすることを説明した。

V. 結果

参加者の概要を表1に示す。

火山噴火に伴う長期避難を体験した後期高齢者の帰島を決意させた要因について分析の結果、図3で示すように170のフレーズ、28のサブカテゴリ、9のカテゴリと5つのコアカテゴリを抽出した。(表2)

表1. 研究参加者概要

年齢	70代後半	8名	80代前半	2名
性別	男性	2名	女性	8名
収入	年金生活	10名		
噴火経験	2000年噴火は	4回目	8名	
	〃	3回目	1名	
	〃	2回目	1名	

表2. サブカテゴリからコアカテゴリ

コアカテゴリ (5)	カテゴリ (9)	サブカテゴリ (28)
経済的要因	在京生活の継続による経済的負担増が予想される	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の法的保障期限切れがあった ・生活費用の負担増となる ・収入が少なく支援が必要となる
	帰島すれば経済的負担が減少する	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の基盤が確保されている ・帰島に関する公的支援金が出る ・家の修理に対する公的支援金が出る
家族的要因	避難中に家族形態変化が生じた	<ul style="list-style-type: none"> ・1人で暮らす困難さを実感した ・家族を亡くした ・家族の入院に関わる負担があった
	家族・血族の協力があった	<ul style="list-style-type: none"> ・帰島について家族で話し合った ・家族同士の思いやりを感じた ・親戚関係のつながりを感じた
	祖先を継承する	<ul style="list-style-type: none"> ・「家」を守る使命感がある
心理的要因	不慣れな都会生活を送った	<ul style="list-style-type: none"> ・差別を感じる ・緑が見えない住宅で寂しい ・東京は人間関係が希薄と思った ・1人では出掛けられなかった ・思ったより避難生活が長かった
	郷愁の思いがある	<ul style="list-style-type: none"> ・心の拠り所だ ・生活拠点としての家の存在がある ・過去の安定した生活を思い出す
健康に関連する要因	避難生活が健康に与える影響があった	<ul style="list-style-type: none"> ・避難中本人または家族が発病した ・避難中は病気が悪化した ・避難生活中に家族の看病をした
コミュニティに関連する要因	新たなコミュニティの確立があった	<ul style="list-style-type: none"> ・げんき農場で体験を共有できた ・げんき農場で新たな学びがあった ・集落を超えた新たな友人が出来た

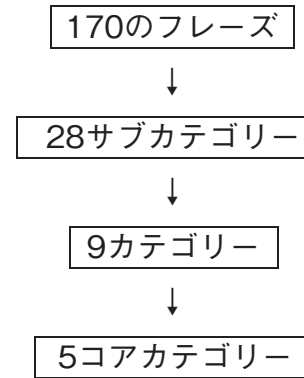


図3. コアカテゴリの抽出過程

(以下コアカテゴリは【 】で、カテゴリは〔 〕で表す)

1. 【経済的要因】

【経済的要因】には〔在京生活の継続による経済的負担が予想される〕と〔帰島すれば経済的負担が減る〕があった。これは2005年2月1日避難指示解除となり、その3カ月後には住宅の無償提供が無くなり、家賃が必要となる即ち避難住宅として暮らしてきた住宅の家賃を払う、或いは他の住宅に転居することを意味した。またこれまで支給されていた支援金や義援金がなくなる事であった。この事実は確実に生活費が増

大することを意味した。年金で生活している高齢者にとっては、島に帰るか、子どもに支援の増額を頼むか、或いは子どもの家族と同居するかを3ヶ月以内に決めなければならない、択一の選択を迫るものとなった。

「東京に残るってことは家賃を払わなきゃいけない」

「補助を打ち切られたら居られないですよ」

「孫は学校でお金がかかるから、これ以上は迷惑をかけられないって思った」

島に在る家や土地に税金を払い、東京では家賃を払う事は高齢者には厳しい現実であった。島での生活は自給自足に近いものであり、全てを買う生活は「お金がかかる」ことを実感させられた。働きたくても高齢者は年齢制限があり、年金と子どもからの援助しか収入はなかった。高齢者は年金と預貯金を取り崩し、家族に経済的な支援してもらいながら避難生活を送っていた。

2004年3月の被災者生活再建支援法の改正で、必要な費用が一部支給されることになった。避難指示が解除されてから2年以内に島に帰れば支給されるというものであった。帰島に際し、都からも支援金を支給されることになった。

2. 【家族的要因】

【家族的要因】には〔避難中に家族形態変化が生じた〕、〔家族・血族の協力があつた〕と〔祖先を継承する〕があつた。避難中と言う非日常的な中で人生のパートナーを失い、対外的には葬儀を営まなくてはならなかった高齢者たちは、家族に支えられながら避難生活を送った。都会生活に適応できず一人では出歩けない時には、家族が同行してくれたりしていた。避難先での生活は、家族の経済的・心理的サポートがあつたから乗り越えられたものであつた。

子どもから一緒に住もうと誘われ、或いは兄弟と老後を過ごそうと家を準備し、子どもに誘われたら東京に残ろうと考えていた高齢者もいた。これらの高齢者に帰島を決意させたのは、まずは遺骨を代々の墓に納めなくては、という思いであつた。

「遺骨をお墓に入れる事が最優先、自分の事はそのあと考えようと思ったの」

帰島後早々にお墓を直して納骨し、法事を営んでいた。

3. 【心理的要因】

【心理的要因】には〔不慣れな都会生活を送つた〕と〔郷愁の思いがある〕があつた。都会の団地生活に適応できず、すぐにでも島に帰りたいと思ったと多くの高齢者は語つた。

「電車に乗る時、切符を買ったり乗り換えたりするのが難しく、一人では出かけられなかったの。いつもお嫁さんが一緒に行ってくれたわよ」

東京では地理と交通機関の利用に不慣れな為、高齢者が一人で買い物に行くのは難しく、誰かがサポート

しないと行動できない、あるいは自由に出掛ける事が困難であつた。また、東京の団地に入居し、島と生活習慣や価値観が違うことを高齢者たちは実感した。不慣れな都会生活を送つた高齢者達は、家族に支えられて4年余りの避難生活を過ごした。

「島へ帰りたかつた」「私の帰るべき所です」

「毎日海を見て暮したいって思ったよ」

「4年半東京で暮らして楽しいこともあつたけど、やっぱり馴染めなかつた」

「団地で掃除をした時、やり方が違つたと注意されて、それから何か言われたくないから外に出ないようにしていた」

団地という既存のコミュニティに新たに加わることは難しく、家族と相談しあるいは一人で、様々な思いを胸に帰島を決意していた。高齢者の記憶に在るのは、緑豊かで穏やかな島であつた。言葉は異なつても全員が島への思いを語っていた。

4. 【健康に関連する要因】

【健康に関連する要因】では〔避難生活が健康に与える影響があつた〕であつた。

「自分で作つた会社を投げ出して、島から追い出されるようにして来たからそれがショックで、避難中は入退院を繰り返してました」

「避難中に高血圧を言われて2年間薬を飲んだけど、島に帰って来たら正常って先生に言われたよ。もう薬は飲んでいません」

「主人は9月に避難して12月に亡くなつたの。病名はストレス性何とかがつて、手術して1ヶ月入院したの、本当に辛かつた」

「私は避難してすぐ具合が悪くなつて、心臓の手術を受けたのよ」

災害による種々のストレスが心身に大きく影響を与え、避難後発病する、あるいは持病が悪化すると阪神淡路大震災の後、言われるようになったが、三宅島でも同様の事象があつたと参加者から語られた。本人あるいは家族が心疾患で手術を受ける、高血圧を診断される、ストレス性の疾患で入退院を繰り返す、亡くなる、糖尿病が悪化するなどなどの例が見られた。

5. 【コミュニティに関連する要因】

【コミュニティに関連する要因】では〔新たなコミュニティの確立があつた〕が抽出された。避難した人々は、八王子市に開設された「げんき農場」で同じ集落の人に会う事が出来、おしゃべりをし、楽しい時間を持つ事が出来た。避難と言う体験を共有し、辛い話をしても分ってもらえる、共感しあえる場であつた。三宅島の場合、避難先は元々のコミュニティから切り離された状態であつたが、「げんき農場」へ行き同じ集落或いは他集落の友人と会う事が出来た。

「げんき農場では同じ集落の人に会つておしゃべりをして楽しかつた」

「みんな辛い思いをしているから、分かりあえた」
「同じ集落の人と一緒に帰ろうって話して帰って来たのよ」

避難前、島内にある5つの集落はそれぞれに集落内で繋がりが強く、島全体の交流は盛んではなかった。しかし、集落と関係ない避難先での入居により、集落を超えた島民同士の交流が持たれるようになった。また、八王子に造られた「げんき農場」では同じ集落の人同士の交流の場となり、そこでの交流がストレス解消にもなったと高齢者は語っていた。

VI. 考察

A. 帰島を決意するまでの要因

1. 島民の心の奥にある思い

最終的に編成された5つのコアカテゴリーは、単独では存在せず互いに絡み合い、影響しあっていると考えられた。参加者の語りから、島民の心の奥にあったのは、「住み慣れた島に戻りたい」という強い思いだったのではないかと考えた。今回の参加者は全員が島に家を持ち、「三宅島に家が有る」ことを心の拠り所としていた。

高齢被災者にとって「住み慣れたまちに戻りたい」は「生きる希望」であり（黒田, 2007, p.135）、「もとの地域に戻ること」は願いである（中西, 1999, p.164）、また住み慣れた故郷を去ることは精神的な財産の喪失である（竹中, 2006）と言われている。

三宅島では再三の噴火体験により、噴火の性質や避難方法を伝承し、噴火に備えて田畑を分散し、代替地を確保するなどの工夫を凝らし、災害に動員できる住民組織が形成されている（太田, 1996, p.13）。廣井（1986, p.116）は、一般にある地域が特定の災害に繰り返し襲われると、その地域には災害が発生する前にはどんな兆候が現われるか、災害時にはどんな行動をしたらいいか、などについての「生活の知恵」が生まれてくると述べている。三宅島の高齢者は幼い時から両親や祖父母・親戚の人たちに多くの「生活の知恵」を授けられながら成長し、言い伝えを実践しながら生きている。それにより、火山との共存が可能になっているのではないだろうか。

2. 帰島を考える

避難指示解除を受けて帰島を考える時、先ず「島に帰って暮らしたい」という強い「思い」があり、カテゴリーにある【不慣れた都会生活を送った】ことから生じる、今まで我慢していたストレスが、それを後押しし、家賃の補助打ち切りという【在京生活の継続による経済的負担増の予測】即ち、家賃という新たな負担が帰島への思いに拍車をかけ、思いを行動化させることとなったと考えられる。更に、帰島するのであれば引越し費用及び再建支援金が支給されるということ

が、帰島を決意させる後押しをしたのではないだろうか。

三宅島の高齢者は内地での避難生活中、家族や親戚から様々な支援を受けている。しかし、「子どもの迷惑にならないように」という参加者の言葉から、内地に暮らす子どもや兄弟・親族にはそれぞれの生活があることを高齢者達は考え、「帰島」を選択したのではないかと考える。中山（2003）は、被災高齢者の生活力量に影響を与える因子を明らかにし、社会資源の存在、助け合える隣人・友人の存在、助け合える家族の存在、住居等の生活環境、情報の存在を挙げている。竹中（2006）によれば、高齢者は新たな状況に適應するのに時間がかかるが、喪失体験に向き合うことを通して新しい自分を築いていく存在であり、安達（2006）は「もともと培われた地域の力は、残された力を拠り所として、より強いつながりを持って新たな地域再生に向けて進んでいく」と述べている。高齢被災者にとって「住み慣れた元のまちに戻りたい」は「生きる希望」であり（黒田, 2007, p.135）、「ふるさとと言うものは人々にとって重要であり、住み慣れた土地や近所の人々とのつながりが生きる支えになる」と前田（2008, p.81）は述べている。

B. 5つのコアカテゴリー間の関連性

1. 【経済的要因と家族的要因の関連】

内地に避難して4年5ヵ月後、2005年2月1日、避難指示解除が出された。村では2月1日から4月末までの3ヶ月は、避難指示解除から大半の村民が帰島するまでに必要な期間「本格帰島期」とし、4月までに帰島できない家族が帰島する期間を5月から7月末の3ヶ月とした（三宅村, 2008, p.94）。8月以降は、それまで受けていた住宅に対する保障が打ち切れ、家賃が必要になる。

家賃補助の打ち切りを知って、参加者全員が帰島を考えたと答えていた。参加者が年金受給者であることから、家賃を払う事は大きな負担を伴う事であり、内地にいる家族にこれ以上の負担をかけられないという結論であったと考えられる。帰島に際し、国から被災者生活再建支援法の改正で、必要な費用が一部支給されることになり、都も支援金を支給することにした。この2種類の支援金の存在は、島民が帰島を選択する際の弾みとなり、強い影響を与え、島へ戻る決意を促進させた要因となったのではないかと考えられる。

2. 【家族的要因と心理的要因の関連】

生活するのに便利な内地より、三宅島の高齢者は帰島を選択した。そこにあったのは、帰島すれば補助金が支給されるということだけではなく、新たな人間関係や住環境に疲れきったことも考えられる。高齢者は新しい環境への適應能力が不十分である為、住環境の変化によって生活に困難を来し易い（酒井, 2008, p.132）と言われている。また、川畑・土肥・瀬藤ら

(2001)は、自然災害の被災者において住み慣れた環境を失わない事が、心理的影響を比較的少なく出来るとしている。被災高齢者の場合、住みなれた家や土地から離れて生活を送るストレス要因には、人間の尊厳性の喪失と他者への依存、馴染みのない近隣と住み場所、近隣関係と社会的ネットワークの喪失がある(Raphael, 1986/1989, p.208-225)とされる。不慣れな都会生活を送った高齢者達は、家族に支えられて4年余りの避難生活を過ごした。三宅島の血縁・地縁関係のつながりの強さが高齢者達を支え、この危機を乗り越えさせたのではないかと考える。

高齢期における親しい関係について、西村・石橋・山田ら(2000)は、日常的な接触と関心の共有を必要とする「交遊」では、非親族である友人・知人が選択されることが多かったのに対して、関与と負担を必要とする「信頼」と「相談」では、親族、とりわけ配偶者や子どもが選択されることが多かった、としている。三宅島は血縁・親族関係のつながりが強いといわれている地域である(小杉, 2005)。昭和40年代以前と比べると弱くなったと高齢者は語っていたが、血縁関係にある者が近い場所に暮らし、高齢者を見守り、何気なく面倒見ている。単に家族という小さな集団ではない、もう少し外側の枠も含めて、一族で高齢者を面倒見る、助け合うという表現が合っている世界である。高齢者が語った「都会では一人で暮らせない」の言葉の中に存在する理由の1つがそこにあるのではないかと考えられた。「帰れるならば早く、知っている顔に囲まれるんびり暮らす世界に戻りたい」と思ったのは、三宅島の高齢者にとってはごく自然のニードであったであろうと考える。

3. 【家族的要因と健康に関する要因の関連】

避難した団地で暮らし、島と違う価値観に戸惑い、人間関係に不調和音が生じ、差別されていると感じ始めた。島での集落と関係なく居住し、慣れない団地生活を送らなければならなかった高齢者は、そのストレスから心身への影響が表れていた。体調の不安定な高齢者が長期に亘る避難生活を乗り切ることが出来たのは、家族の支えがあったからではないかと考える。

避難生活中は心身に負荷が掛かることから発病しやすい状態にあり、災害による生活環境の変化や精神的ストレスが疾病の発症にも影響を与え、避難生活の長期化はストレスを増強させ、精神症状が悪化する(酒井, 2008, p.131)といわれ、及川・久保・関ら(2008)は、三宅島帰島3年目の調査から、噴火災害による喪失体験が挙げられ、特に家族との別れや病気の発症によるストレスが高かったことがうかがえる、と述べている。

4. 【心理的要因と健康に関する要因の関連】

高齢者たちは避難して少し経つと、何か言われると嫌だから外に出ず家にこもる傾向の人が現われていた。団地の先住者が避難して来た人に意地悪をしてい

ると思えないが、言われた方は「差別された」と感じていた。見方を変えれば「思いやり」と受け取れるが、そこには被災者の心理があった。

酒井(2008, p.132)は、高齢者は新しい環境への適応能力が不十分である為、住環境の変化によって生活に困難を来し易い、また、災害によって引き起こされる環境や状況の変化は、被災者の心身の健康状態に直接影響を及ぼし、通常よりも精神的にストレスを受け易い状態となり心身への影響が引き起こされると述べている。避難先での入居は既存のコミュニティに新住民が入って行く事であり、適応能力が低く異なる文化背景を有する高齢者には厳しいものであったのではないだろうか。前田(2008, p.81)は生活再建ストレスのストレスサーとして、「孤立感」、「不公平感」、「終わりのなさ」、「新しい環境に適応する」を挙げている。三宅島の場合、島での集落と関係なくバラバラに居住し、ガスの終息は予測がつかず、慣れない避難先での団地生活を送らなければならなかった。避難生活が何時まで続くかも分らない状況で、高齢者達は精神的にも不安定な状態であったと考えられる。

5. 【心理的要因とコミュニティに関する要因の関連】

中山(2003)は、被災高齢者の生活力量に影響を与える因子をあげ、社会資源の存在、助け合える隣人・友人の存在、助け合える家族の存在、住居等の生活環境、情報の存在を挙げている。これに照らし合わせると、「げんき農場」での活動は、被災高齢者が被災を共有し、隣人・友人と情報交換し語り合う場、個人的な感情の整理や助け合う新たな関係の形成、即ち中山の言う生活力量が形成され、相互に支え合っていたのではないかと考える。

避難によって失ってしまった集落のコミュニティは、元の地域へ再定着したとしても、前と同じコミュニティを作る事は難しい(安達, 2006)と言われている。げんき農場で同じ集落の人と一緒に島に帰ろうと約束をし、早い時期に帰島した高齢者達もいたことから、同じ境遇で辛い体験を乗り越えたと言う共有体験があり、高齢者間のつながりは強固なものとなり、帰島への推進力と成ったと考えられる。

6. 【健康に関する要因とコミュニティに関する要因の関連】

この両者の関連は高齢者の「同じ集落の仲間とおしゃべりしたり、グループを作って一緒に出掛けたりした、楽しかったよ」「土をいじっておしゃべりをして、楽しかった」などという語りから、「げんき農場」での活動が精神的側面に作用したと考えられる。桑村・小杉(2004)は、「げんき農場」を訪問した保健師が「血圧が不安定だった人が農場に通うようになってから、見る見る安定してきたと驚いていた」と述べている。災害前の三宅島には濃密なコミュニティがあり、身近

な人たちの支え合いで、公的なサービスは最低限あれば暮らせた人が多い。高齢独居でも決して孤独ではなかった（桑原，2005）。広域な避難によってコミュニティが分断された結果、自助・共助の力が途方もなく弱くなり、行政に依存的になっていく状況が見て取れる（小杉，2005）状況にあった。内地への避難と言う現実から一度は崩れた三宅島のコミュニティであったが、「げんき農場」や内地でそれまでに経験していないことや他集落の人との交流を経験し、以前の集落到固執した狭い人間関係ではない集落と言う単位を越えた広がりのある人間関係が出来るようになり、島単位の交流を可能にした。

VII. 結語

長期避難生活を体験した後期高齢者に帰島を決意させた5つの要因が見出された。その根底にあったものは「住み慣れた島に帰りたい」という強い思いであった。5つの要因は互いにつながりを持ち、帰島を決意する際に影響を及ぼしていたと考えられる。被災高齢者にとって「住み慣れた元のまちに戻りたい」は「生きる希望」であり（黒田，2007，p.135）、「多くの高齢者にとって、『もとの地域に戻る』ことは願いである（中西，1999，p164）。また、「何回かの噴火を経験しながら厳しい環境の海山で育ち働いてきた世代の人たちの故郷への愛着は大きい」（桑村，2009，p.215）と述べられている。八王子に開設された「げんき農場」は分散入居によって壊れたコミュニティに変わる役割を果たした。高齢者の精神面を支え、ストレスから解放させる役目をしてきた。参加者の語りから、ここでの活動・結末は帰島を決意する際、影響を与えていたことが明らかになった。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界と課題について以下に述べる。

第1点、本研究は火山噴火に伴い東京に長期避難した後帰島した三宅島の後期高齢者を対象とした、特定の地域に密着した研究であることから、本研究結果を他の自然災害によって避難している高齢者に、そのまま適用するには限界がある。今後さまざまな特性を持った地域における研究を重ね、知見を増すことにより、看護実践への示唆を深め、災害中長期における被災高齢者への看護を確立し、発展させる必要がある。

第2点、研究者のデータ収集と分析能力の限界である。本研究では、インフォーマル・インタビューでデータを収集し、帰納法によってコアカテゴリーまで抽象度を上げていった。参加者の方々には合計3回の面接で研究に協力して頂き、多くの貴重なデータを集めることができた。しかし、今回分析できたのはその一

部であり、語って頂いたものを全てデータとして使いこなせなかった。また、研究者の根拠を持った考えを組み立てるという能力と、適切に豊かに考えを表現できる能力を向上させなければならないという課題が見えて来た。

謝辞

本研究に取り組むにあたり、多大なご指導をいただきました日本赤十字看護大学小原真理子教授には、心より御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました参加者の皆様に深謝申し上げます。

本研究は平成22年度日本赤十字看護大学大学院看護研究科国際・災害看護学領域の修士論文にまとめた内容の一部である。本研究の一部は第12回災害看護学会で発表した。

文献

- 安達和美（2006）. 災害と喪失. 臨床看護, 32（13）, 1922-1924.
- 浅野幸子（2007）. 第4章 火山噴火 第3節 三宅島噴火災害（全島避難）. 浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛編, シリーズ災害と社会2 復興コミュニケーション論入門. 東京：弘文堂.
- 池田清子・山本靖子・中野智津子他（2002）. 仮設住宅から復興住宅に移った高齢住民の健康と生活に関する－5回目の追跡調査より－. 日本災害看護学会誌, 4（1）, 46-57.
- 廣井脩（1986）. 災害と日本人－巨大災害の社会心理. 東京：時事通信社.
- 川畑摩紀枝・土肥加津子・瀬藤乃理子他（2001）. 在宅虚弱高齢者の震災体験と心理的影響 リソースの喪失とその影響. 保健婦雑誌, 57（6）, 464-470.
- 木村拓郎（2007）. I 日本と世界の自然災害の復興動向（1991～2006年）日本の災害（5）三宅島噴火災害（東京都）. 塩崎賢明・西川榮一・出口俊一編, 災害復興ガイド－日本と世界の経験に学ぶ. 京都：クリエイティブかもがわ.
- 国土地理協会（2009）. 住民基本台帳人口要覧（平成21年度版）. 東京：162-163.
- 小杉真紗人（2005）. 三宅島噴火災害を支援して. 公衆衛生, 69（6）, 460-463.
- 厚生労働省（2010）. 後期高齢者医療制度. 2010/2/検索, <http://www.mhlw.go.jp/>より.
- 黒田裕子（2006）. 第1章 阪神大震災を通して自己の可能性を見つける 4 仮設住宅で（6）住宅の整備. 似田貝香門編, ボランティアが社会を変える. 大阪：Kansai看護出版.
- 黒田達雄（2007）. II 災害復興の論点－復興編－（5）復興指標としての「コミュニティ」. 塩崎賢明・西川榮一・出口俊一編, 災害復興ガイド－日本と世

- 界の経験に学ぶ. 京都：クリエイツかもがわ.
- 桑村健司・小杉眞紗人 (2004). 三宅島噴火災害 被災住民のコミュニティの力と保健所のサポート. 保健師ジャーナル, 60 (4), 342-350.
- 桑村健司 (2005). 三宅島民の現状と帰島後の課題. 月間福祉, 88 (1), 40-43.
- 桑村健司 (2009). 第4章 帰島者の生活実態 第4節 高齢者の現状と今後の課題 1 高齢者世代ほど故郷に愛着. 田中淳・サーベイリサーチセンター編, シリーズ災害と社会8 社会調査でみる災害復興. 東京：弘文堂.
- 前田潤 (2008). 第2章 実践 災害サイクルから見た各期の対応. 小原真理子監修, いのちとこころを救う災害看護. 東京：学習研究社.
- 三宅島 (2009). 三宅島 MAP. 2010/1/5検索, <http://www.miyakejima.net/map.html>より.
- 三宅村 (2008). 平成12年 (2000年) 火山噴火の記録. 東京.
- 村榮 (2009). 第4章 帰島者の生活実態 第2節 帰島後の日常生活－住民の「三宅島便り」 9 帰島3年半の思い. 田中淳・サーベイリサーチセンター編, シリーズ災害と社会8 社会調査でみる災害復興. 東京：弘文堂.
- 中西典子 (1999). III 避難生活の諸相 2 被災高齢者の生活再建と地域の再生が持つ意味 (1) はじめに. 岩崎信彦・鶴飼孝造・浦野正樹他編, 阪神・淡路大震災の社会学 第2巻 避難生活の社会学. 京都：昭和堂.
- 中山貴美子 (2003). 阪神・淡路大震災被災高齢者の語りにみる生活力量形成過程とその影響因子－恒久住宅に住む一人暮らし高齢者を対象に－ 老年看護学, 7 (2), 105-115.
- 新村出編 (1998). 広辞苑 第5版. 東京：岩波書店.
- 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり他 (2000). 高齢期における親しい関係－「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択－. 老年社会科学, 22 (3), 367-373.
- 及川裕子・久保恭子・関美雪他 (2009). 三宅島噴火災害の被災島民のニーズ－帰島3年目の質問紙調査から－. 日本災害看護学会誌, 11 (1), 148.
- 大野かおり・熊川ケイ・中野智津子他 (2001). 復興住宅住民の健康と生活を支える援助. 神戸市看護大学短期大学部紀要, 20, 91-96.
- 太田保之 (1996). 災害ストレスと心のケア. 東京：医歯薬出版.
- Raphael. B (1986) / 石丸正 (1989). 災害の襲うとき. カスタトロフィの精神医学. 東京：みすず書房.
- 酒井明子 (2008). 第2部 災害の時期別看護. 黒田裕子・酒井明子監修, 災害看護 人間の生命と生活を守る 第2版 (pp.126-134). 大阪：メディカ出版.
- 塩崎賢明 (2007). II 災害復興の論点－復興編－ (4) 住宅復興をどう考えるか. 塩崎賢明・西川榮一・出口俊一編, 災害復興ガイド－日本と世界の経験に学ぶ. 京都：クリエイツかもがわ.
- 総理府統計局 (2010). 統計表で用いられる用語分類の解説 5. 2010/2/6検索, <http://www.star.go.jp/data/kokusei/2000/guide/3-05.htm>より.
- 竹中星郎 (2006). 老年期をいかに生きるか：喪失体験と再生. Geriatric Medicine, 44 (1), 27-31.